第 79 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

2019（令和元）年度　学位記授与式式辞

弘前学院大学学長　吉岡　利忠

本日、２０１９（令和元年度）年度の文学部46回生、社会福祉学部18回生、看護学部12回生ならびに大学院社会福祉学研究科修士課程16回生、大学院文学研究科修士課程14回生の学位記授与式にあたり、ここに総勢１６８名の皆さまが弘前学院大学から卒業・修了して行きます。誠におめでとうございます。この中の研究科修了５名は主査、副査からの厳しい口頭試問、修士論文の審査、論文発表を終え終了判定会議ののち修士号を頂きました。

本年は学校法人弘前学院創立１３４年目を迎えようとしております。皆さまにはこのような歴史を積み重ねている弘前学院で学んだことを、是非、誇りにして頂き、社会人になってからも心のどこかにおいて欲しいと思います。

ここ数か月、新型コロナイルス、COVID-19と名称が決まりましたが、毎日のように報道されています。人類の歴史・進化は感染症とともにありました。天然痘、ペスト、コレラ、スペインかぜ、SARS、MERS、そして今回の新型コロナウイルスの感染です。不特定多数の人たちが集る場所では感染の危険があるということで、このような学位記授与式になりました。保護者の皆さまには、ここに同席することがかなわず新築された一号館の４階の大スクリーンで式の進行を見守ることになりました。私は弘前市医師会の理事および感染症対策グループの一員として万全の準備をしておりますのでどうぞご安心して下してください。

何せウイルスは極々小さく、百万分の一ミリメートル、すなわちミクロンの千分の一、ナノメーターの大きさです。電子顕微鏡を用い特殊な染色を施しようやく観察できる大きさで、普通のマスクなどでは素通りしてしまいます。咳やくしゃみなどでそれらにウイルスが混入している場合は拡散しないであろうことは期待できます。なんと言っても体調が落ちている状態ではウイルスはここぞとばかり猛威を振るうようです。ですから皆さんは自分の健康維持管理を徹底して頂きたい。体調がよければ免疫抗体力も上がります。ちなみに普通の細菌（ばい菌）や細胞はウイルスの千倍もの大きさ。ウイルスは核酸の一種であるRNAウイルスであり、細胞の中に侵入し細胞の核をコントロールし自身の分子を増殖し次々と細胞や組織を破壊し病気を発症させます。さて、このウイルスにどのように対応すれば良いのでしょうか?その方略、ストラテジーです。いわゆる問題解決方法です。現在、わが国を含め世界中の専門機関、研究者の知識も導入し対応策を模索中です。このような世界を揺るがす問題は少々難儀ですが、皆さんは社会に出るとさまざまな問題に対して解決策を講じなければなりません。本学で学んだ皆さんには常に能動的、積極的な姿勢が備わっていますのでその意気込みで社会に飛び出して下さい。

問題解決姿勢で知っておいて欲しいことがあります。それはものの流れを読み掴むということだろうと思っています。この流れを掴むことについて中枢神経系である脳の働きについて考えてみました。脳は大脳、中脳、間脳、小脳などに分けることができますが、全て神経細胞、神経線維の集まりです。脳の機能についてはまだまだ知らないことばかりですが、流れを読むということは、多分、脳の全てが活動していることだと思っています。決して局所だけの脳が使われているのではないでしょう。たとえば、リンゴを見るリンゴを取るなどは、大脳の視覚領域と運動領域が関係し、局所だけの神経細胞・神経線維が働いているのではないでしょうか。リンゴという知識だけなら脳の中心部にある海馬が関係しています。さらにリンゴの匂いや味やフレーバーを考え、鮮度や産地や種類を推察し、さらにリンゴを食べたらその消化吸収してどんな栄養があるのかカロリーはどのくらいか、リンゴを使った料理は、などと考えると大脳、中脳、間脳、小脳など全てが活躍することになるだろうと思います。それらに存在する神経細胞と神経線維との神経回路そして情報伝達が行われており、一連の流れを掴み取ることが可能になると考えられます。仕事においてもその流れをからだで受ける、視覚で受ける、聴覚で受ける、嗅覚で受けることが必要で、あらゆる方面からさまざまな情報を受けることで、問題解決に有効な手段が自ずと出てくるというわけです。

最後になりますが、毎年の授与式でお話しすることですが、将来、皆さんが伴侶を得て、皆さまのお子様たちが弘前学院聖愛中学校・高等学校そして母校となる弘前学院大学・大学院を目指していただき、弘前学院の歴史を共につくっていただきたいものです。そのような、皆さんに愛される教育機関になるように私ども教職員は教育環境、研究環境、大学運営環境を形作って行きます。以上、皆さんの前途を祝し、私の式辞といたします。皆さまに神の思し召しを。

God Bless You.

中長期目標実施計画の確立・実践に向けて

学校法人弘前学院
理事長・学院長　阿保　邦弘

十三「教育改革の行方」『激震そのあと』

新型コロナウィルスの感染が世界中で拡大している。

つい数か月前は対岸の火事程度に思っていたが、じわじわと影響が出てきた。

息苦しささえ感じる時勢の影響か、卒業式を中止する大学まで現れた。

本学院から旅立つ若者たちには、この逆風に怯むことなく、力強く未来を創造していくことを願っている。

また、桜が芽吹く4月には中高大そろって正常な教育環境まで回復することを祈る。

さて、本題である新入試制度に戻るが、そもそも今回の教育改革は平成二三年十一月中教審初等中等教育分科会に高等学校教育部会が設置され、高校教育の在り方と大学教育との接続が二十年ぶりに議論されたことに始まる。

平成二四年八月には、今後の予測不可能な社会を支える人材育成を目指して、中教審に大学入学者選抜の改善や高校と大学教育の円滑な接続・連携の強化が諮問された。

平成二五年十月には、新たに官邸に設置された教育再生実行会議が発表した第四次提言で、到達度テストの基礎レベル、発展レベルの二つが提言された。

平成二六年十二月には、中教審から高大接続の実現に向けた高校・大学入学者選抜の一体的改革の答申があった。

それを踏まえて、平成二七年一月に策定された高大接続改革実行プランに基づき、新たに高大接続システム改革会議が組織された。

そこでは、高等学校基礎学力テストと大学入学希望者学力評価テスト、個別選抜の推進、多様な学習活動・学修成果の評価の在り方の三点が議論された。

この時の論点が今でも議論されていて、その後に学力の三要素評価に合わせた共通テスト改革、個別大学選抜のルール変更等が決定した。

本学では、いち早く国の教育改革を察知し、会議が設置された年の十二月には、会議の委員として活躍していた講師を招いて研修を実施している。

その翌年からは国の会議の中枢にいる講師をはじめ多くの講師を招聘して学内研修を重ね、より充実した入試を模索した。

平成二十九年七月、「平成三十三年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」が出るやいなや、本学ではより具体的な検討に入った。

平成三十年一月には、「弘前学院大学新入試制度対策基本方針」を発表し、本学の教育充実を図る入試とすることに焦点を絞って検討を進めた。

難解・複雑な選抜となることを避け、現状の入試レベルを維持しながらも高大接続改革に添った総合的な評価を行う入試を目指した。

高校生にとってわかりやすく、高校側にも余計な負荷をかけない、また本学の多くの関係者もなるほどと納得できる入試になるように工夫を重ねた。

最終的には入学した学生が大きく成長するように、学生生活のスタートダッシュに相応しい入試にしようと努力した。

その意味では、文科省の立ち上げた二本柱はもろくも崩れ去ったが、今回の激震（混乱）に対して本学はいささかも動揺することはなかったのである。

「弘前れんが倉庫美術館」開館記念
弘前学院大学構内の
駐車場無料開放

◆弘前れんが倉庫美術館　開館記念
日付：4月11日（土）～12日（日）
時間：8：30～21：00

・大鰐線に乗って弘前公園へ。
中央弘前駅で降車時にもらえる乗車証明書で弘前城などの有料区域に無料で入れます。

※8：30～21：00、夜間施錠、盗難・事故への責任は負いません。車中での宿泊はご遠慮ください。

詳細は、大学HPで随時更新します！

研究紹介㊼

精神科デイケアにおける職務上の困難な現象について

看護学部　准教授　菅原　大輔

日本の精神医療は患者の長期入院をできる限り避け、早期に地域で過ごしてもらうことを念頭に推進してきた。しかし、国際的に日本の精神病床数は33・8万と多く、平均在院日数も274・7日と多いこと、さらに退院患者の再入院率は1年時点で約37%と高いことが示されている（厚生労働省資料，2018）。そのため、精神科訪問看護や包括型地域生活支援プログラムなど利用者が地域で暮らしながらサービスを受けることが増えてきており、精神科病棟以外に従事する職員の活躍の場が広がっている。

なかでもデイケアは、病院と地域をつなぐ重要な橋渡しの施設と考えており注目している。精神科デイケアを簡単に説明すると、精神的な疾患で社会生活に困難を感じている人が通所し、文化活動（料理教室・書道・園芸・カラオケなど）やスポーツ（卓球・バレー・体操・ヨガ教室など）を行っている。専門多職種で連携してサポートしており、その効果は再発や再入院の予防、生活リズムの改善、対人交流の訓練、就学や就職の支援など多岐にわたっている。

しかし、地域で暮らしているデイケア利用者は病棟で入院している精神疾患患者とは違い地域で生活しているため、デイケア以外の具体的な行動内容が見えにくいこと、また、多職種との連携や病棟および外来との連携も行いながら利用者と関わることが多いこと、さらに、利用者は精神症状がある程度残存している状態で地域生活することが増えてきているため、デイケアに従事する職員は現場において、精神科病棟とは質の違う様々な「困難さ」を抱えていることが多いことが推察された。

そこで筆者は、デイケアにおける職員の困難性を明らかにするため東北圏内を中心にアンケート調査を行い、分析をした。その結果、①利用者への直接的な介入に伴う困難性（利用者の生活習慣病予防や服薬指導、幻覚妄想状態への介入）②職員間の価値基準や連携に伴う困難性（職員間の支援方法に関する温度差やそれに伴う不信感）③利用者のリカバリーや地域の理解に伴う困難性（地域の人々によるデイケアへの偏見や無理解、ノーマライゼーションの遅延）などが確認された。結論として、デイケアにおける困難性は、利用者に対する介入場面に留まらず、職員間の連携不和や利用者への理想が職種間で差違が生じていること、さらに国や施設の方針と利用者の思想に大きな乖離があることなど幅広い広がりが確認された。

このような研究結果を踏まえて、今後は全国的な比較も含めて調査し、地域による差異も検討していく必要があると感じている。

談話室

「点と線から面へ」

文学部　英語・英米文学科　教授　佐藤　和博

昨年銀座の伊東屋に、たまたま立ち寄った時、地階で催し物をやっていて覗いてみたら、バウハウス100年を記念する展覧会であった。100年という区切りの年なので、お土産に会場で売られていた鉛筆のセットを買ってきた。

鉛筆には、バウハウスのモットーであろうか、“Everything starts from a dot.”という言葉が印されていた。その鉛筆は研究室の机の上、すぐ目の前に置かれていて、「あらゆるものは、点から始まる」というメッセージを、いつも投げかけている。それを目にするたびに、その意味を考える。

バウハウスは、1919年ドイツのワイマールに設立された美術学校で、美術、工芸、建築、デザインなど幅広い分野にわたる教育が行われていた。1925年にデッサウに移転。1933年にナチスによって閉鎖される。その14年間に世界のデザイン、建築に大きな影響を与えた。例えばマルセル・ブロイヤーの椅子など、その機能的で装飾を排したデザインは、決して古びて見えることなく今日でも「モダン」に見える。100年近く前に制作された椅子なのだが。

建築家のヴァルター・グロピウスが初代校長で、ワシリー・カンディンスキー、パウル・クレー、ピエト・モンドリアンなど西洋美術史に名前の残る錚々たるメンバーが学生の教育にあたった。

グロピウスは、校長になる前に、建築家でインダストリアルデザイナーでもあるペーター・ベーレンスの事務所で働いていたという。そこには、あのスイス生まれの建築家、若き日のル・コルジュジエも。

このようにバウハウスを巡る人々の関係を辿ってみると、グロピウスは、遠くル・コルジュジエの弟子前川國男まで繋がっている、ということになる。

弘前にある前川建築も、どこかに、バウハウスの影響があるのかもしれない。その影響「点と線から面へ」となって弘前にも伝わっているのだろうか。

看護学部FD講演会を終えて

看護学部　教授　大瀬　富士子

看護学部講演会を2月1日（土）10時から2時間、場所は看護学部棟中講室2において開催しました。講師は本学文学部の松橋俊輔講師で、テーマは「大学における教育を問い直す（第2弾）―ジョン・デューイの教育理論における問題解決学習の本質を考える―」でした。大学における教育を問い直す（第1弾）は、昨年度、埼玉大学教育学部准教授の七木田文彦先生に「大学における教育を問い直す―学びをデザインする授業の創造―」をテーマに講演会を行なっていただいていました。希望するFD講演会のテーマで寄せられた中に、「大学教育とは何か」という根本を問う研修会を開催してほしいという希望があり、第1弾、第2弾と継続して学びを深めるテーマとしました。

講師の松橋俊輔先生へは、着任され間もない時から何度かお願いをして実現できた講演会でした。松橋先生は講演会の御準備の際に看護教育の現状を把握したいということで、2人の教員の講義風景を見学して下さいました。

「アクティブラーニング」は、いかにして「主体的に考える力」「学び続ける力」を育てうるか？という問題意識と、How We Think におけるデューイは「主体的に考える力」・「学び続ける力」をどのようなものとして捉え、いかにして育てうると考えていたか？という問いをもとに話して下さいました。アクティブラーニングの実践のイメージも膨らみましたが、方法論ではなく奥深い問いを考える機会となりました。講演会後のアンケートにも「アクティブラーニングのねらいは、学生の主体性を育てること、学生が生涯学び続ける力を育てることがとても印象に残りました。」「問題解決思考だけでは、人間性を高める教育はできないということも確認できた。」「第2報を行ってほしい。」「このシリーズは継続してほしい」等という意見でした。

私の印象に残ったことでは「もっとも記憶に残る教師とは、新たな知的好奇心を呼び起こした教師、知識や技術のある領域への自分自身の情熱を伝染させる教師である。」認知的レベルへ結び付けていくのが教師の仕事と話されたことであった。松橋先生の講演そのものが私の知的好奇心を呼び起こして下さり、学生に知識を持たせることに力を注いでいた自分を振り返り反省し、昨年度の七木田先生がお話になられた知識の配達人ではなく旅の道案内人にという言葉と繋がりました。私自身がもっと学びたいと思う講演会でした。

学びの扉が開かれていることに感謝―「開放講義」体験記

聴講生　鈴木　亜子

初めて「哲学」の授業をとった時、一緒に社会人として受講されていた親子がいらした。お母様は白髪で、娘さんと二人並んで受講されていた。

毎回先生が、本の内容から質問をする。学生の意見が二、三出た後で、「社会人の意見」として同じく聴講生に問う。お母様が、静かに答えていたのを思い出す。金曜の4コマ目の前後にキャンパスを、お二人で仲良く歩いていたのを覚えている。

今より「アクティブラーニング」の叫ばれていない時代で、受け身の体勢で授業を受けても、最後の10分程で、意見発表とは別に各自の意見を紙に書いて提出する。その方法は現在と変わらない。紙の中には、社会人も含め、学生の意見や告白が綴られている。今はなき旧校舎の4階大講義室で、カントの考えを先生に語られ、本を共に読みほどいた。

世の中の15歳以上の人間を、学生と社会人に二分したら、学生の数は一握りだ。大概の学生は、決まった年数を学校で過ごし、社会人となる。人生は社会人になってからの方が長い。学齢期から大卒までで、その後は、一生社会人である。学生の中には、一生分の勉強を大学で終える人もいるだろうし、職業についてから新たな学びを必要とする人も多いと思う。もう、勉強なんかしたくないという人もいるかもしれない。

しかし、私が社会人になってからの学びは、その多くがとても楽しいものである。社会で学べないものは、学校にあったのかということに、社会に出てから気づく。社会人になって学ぶ時、自分の引出しにあるものを物差しにして、自由に長さを測らせてもらう。

聴講生として、いくつかの授業に参加させてもらい六年を過ごした。学生たちの意見は、時に若く素直であり、明快で、正直で、こちらも身の引き締る思いを味わう。

先に述べた親子の聴講生のように、学生と私自身は、親子ほどの年齢差がある。世代が異なっても、同じ哲学を学ぶ。その時、学びの扉が開かれていることに感謝している。

「オープン型オレンジカフェ『橙燦カフェ』に参加して」

藤田和香那　山本みなみ　佐々木桃佳　沢目晏由

橙燦カフェは、弘前第三地域包括支援センターの職員の方、地域で活動されている民生委員の方、ボランティアスタッフの方などと社会福祉学部の学生が協力して、地域で暮らす住民を招いて認知症について考えながら楽しい時間を過ごすカフェです。毎月1回土曜日に大学のラーニング・コモンズを使用して行っています。また、弘前学院聖愛中学高等学校の調理部による美味しいお菓子も参加者の楽しみとなっています。

カフェは、ミニ講話の時間とカフェタイムの時間と質問タイムの時間に分けられて行われています。ミニ講話の時間では、毎回講師の方を招いて、認知症のことや、健康のことについて話して頂き、参加者と共に学ぶことができます。カフェタイムの時間では、コーヒーやお菓子を食べながら、講話や日常生活のことなどをお話しして交流を深めています。質問タイムの時間では、講話を聞いて疑問に思ったことを講師の方に質問し、知識を深めることができます。カフェの雰囲気はとても温かく、和やかな時間が流れており、交流の大切な場となっています。

約1年間ボランティアとして橙燦カフェに参加させて頂き、たくさんのことを学ぶことができました。初めは、参加者と何を話していいのかわからず、戸惑うこともありました。しかし、参加者から「若い人と話せて楽しい」などと声をかけてくださり、段々緊張せずにお話しすることができました。また、参加者に対しての職員の方やボランティアスタッフの方の関わり方を見ることができ、コミュニケーションの取り方や参加者とお話ししている時の表情や声のトーンはとても勉強になりました。

今後はより橙燦カフェが、地域で暮らす参加者の憩いの場となるようにしたいと考えています。第三地域包括支援センターの方や地域の方と打ち合わせを重ねながら、弘前学院大学だけではなく、弘前医療福祉大学の学生を招き、救急について教えて頂いたり、hug work の事業所を通じて、同じ地域で暮らす障がい者の方などに参加して頂き、連携を図っていきたいと考えています。そして、橙燦カフェが年齢や性別関係なく多くの方々との交流ができる場となるようにしたいです。

日本語・日本文学科　卒業論文発表会

文学部　日本語・日本文学科　教授　鎌田　学

二月一日（土）十三時から十五時まで、本学一号館三階講義室において、年度末学科恒例の卒業論文発表会を行った。参加学生は七十六名。四年生ばかりではなく、将来、自ら卒業論文を作成しなければならない一年生も多数出席した。

今回各ゼミから少なくとも一人が発表者として登壇しているので、この会は卒業論文指導教員の専門分野が一目でわかる機会となった。発表者は事前に用意したレジュメを使いながら、論旨を簡潔に説明。その後、進行役の教員あるいはフロアの学生からの質問に対して応答する。この受け答えが、うまくできる人とそうでない人様々だが、いずれにしても普段の授業では本格的に味わえない「質疑応答」の経験であることは確かである。

以下、当日の発表者とタイトル。

［講義室１］
小山　晶　日本の百合文化について
工藤聖華　管理・監視社会についての研究
工藤佑華　スタジオジブリ作品についての研究
柴谷映理菜　現代日本における e-sports についての研究

［講義室２］
八戸唯衣　バスケットボール漫画の研究
三上真澄　西尾維新論
藤田妃保　現代社会の敬語について
白取拓斗　『こころ』論―先生とKの死の真相―

［講義室３］
横山楓子　『玉水物語』研究―異本『紅葉合』との比較―
中川芽姫　軍記物語における「死にざま」の考察―『平家物語』を中心に―
岩田彩香　六条御息所の生霊の研究
木村優子　酒を讃むる歌の考察―大伴旅人の価値観・世界観―
佐藤妙香　月立ちと倭建命の死―美夜受比売の賢し女ぶり―

上海外国語大学での短期語学研修

英語・英米文学科　2年　三上　華歩

私は、去年の夏休み期間を利用して8月3日から23日まで上海外国語大学3週間の短期語学研修に行きました。もともと私の父が会社の出張で中国に行っていることもあり、私も中国語を学ぶことに興味を持ったのが中国留学のきっかけです。

留学中の学習スケジュールは、午前中に講義があり、午後からは自由時間でした。クラスは事前にテストをして能力に応じたクラスに分けられます。クラスに入って自分のレベルより高いと感じたら、1度だけクラスを変えることができます。私は、配属されたクラスのレベルが高かったため、クラスを1つ下げました。講義中はすべて中国語で行われ、ネイティブの中国語を聴きながら慣れないながらも必死に理解しようと努力しました。それにより、自然とリスニングの能力は上がりました。教科書の会話文を暗記して実際に演じてみる講義や中国の文化について学び、母国の文化との違いを考える講義もあり、とても楽しかったです。私のクラスには主にロシア人、イタリア人、アジア出身の留学生がいました。現地の学生は夏休み期間だったためにとても少なかったです。

午後は、もともとスケジュールに組まれていたツアーに参加してみたり、一緒に中国留学した仲間と観光地や買い物にいったりなど、満喫しました。ツアーは参加自由です。申し込みも不要なので行きたいツアーに参加できます。ですが、切り紙や習字、太極拳などの体験は事前に申し込みが必要でした。

また、生活の面では物価が安い為、とても暮らしやすかったです。滞在した大学のホテル周辺はショッピングセンターなどの施設が近くにあったので便利でした。学食を利用する際は、学食カードを利用して食べることができます。ほとんど日本円で約２００円で美味しいご飯を食べることができます。研修が終わると、帰国までに時間があったので、上海ディズニーに行って満喫しました。

上海留学を終えて、3週間は長いようでとても短い時間でした。ですが、異文化を直で感じながら暮らした3週間はとても濃いものとなり、留学前よりも自分に自信を持つことができました。留学をする事で何かしら必ず役に立つので、興味があったら是非参加してみて下さい。

韓国のチキンは本当に美味しいです！

英語・英米文学科2年　斎藤　愛実

私は9月から12月の4ヶ月間、韓国の釜山外国語大学に留学しました。一言で言うと留学を経験できて本当に良かったです。

私は釜山（日本で言うと大阪のようなところ）で4ヶ月過ごしました。一番有名なソウルと比べると、人柄的には少し気が強く、方言や訛りが強い地域です。4ヶ月という短い期間でしたが私はたくさんの文化の違いを本当にたくさん感じました。一番衝撃的だったのは、バスです。韓国のバスはまるでジェットコースターです。座っていてもかなり揺れて危険ですが、立っているときはさらに注意が必要です。どこかに掴まっていないと必ず吹き飛ばされます。また、釜山という地域はせっかちな人が多いためか、車のクラクションが絶えず鳴っていて最初は本当に怖かったです。この他にも日本との文化の差をたくさん学び、戸惑うこともありましたが、ずっと日本で過ごしてきた私にとって、とても新鮮であり自由で面白い国だと感じました。

現在の韓国と日本は、政治の面ではあまり仲が良くなく、いざ留学するとなったときも、危険だという声が多く不安な時期でした。しかし、実際に生活してみて、優しい方や助けてくださった方、サービスしてくれた方もいて、日本人だからと差別されることは全くなかったです。

私はこの交換留学を通して学んだことがあります。まず、韓国のチキンは本当に美味しいということです。韓国にはチキン店が数多くあり、また配達文化が盛んで、韓国人はみんなよく配達してチキンを食べます。韓国のチキンを食べることは私にとって憧れで、初めて食べたときは衝撃的な美味しさでした。日本のチキンとは全く違い毎日食べても飽きません。こんなに美味しい食べ物が日本で食べることが出来ないのは本当に悲しいし、もっと広まるべきだと思いました。そして、何よりも、私は語学力を上達させることができて本当に嬉しいです。初歩のレベルだった私が、普段歩いていて分からない単語はすぐ検索したり、先生の話をよく聞いたりしていたら、徐々に韓国語に慣れてきて自然と理解できるようになりました。自分も韓国人のように韓国人と会話できているという事実が嬉しくて、また、それが自信にもなりました。大学にはこのような貴重な機会を与えてくださり本当に感謝しています。ありがとうございました。

韓国釜山での留学生活で学んだこと

英語・英米文学科2年　安田　紫音

私は韓国の釜山外国語大学に短期間の留学をしました。中3の時から韓国語を独学で学び、日常生活で使える程度の言語能力を身につけました。きっかけは友達が韓国のアイドルを勧めてきたことです。そのアイドルグループに惹かれ、取り憑かれるように韓国語を勉強しました。最初は、ただひたすらノートにハングルを書いて覚えていましたが、基本が出来たら動画などを見ながら聞いて単語を覚えました。そうするうちにだんだん単語の知識が増え、話せるようになりました。韓国語を勉強しながら感じたことは外国語を学ぶことは楽しいということです。言語に対してそういう感情を持ったのは初めてでした。

大学では英語を中心として学んでいますが、2年生の初めに韓国に留学する機会が出来たのでしてみようと思いました。海外で生活することが初めてだったので、最初は不安が大きくてこれから4ヶ月間やっていけない、家に帰りたいと泣いた日もありました。でも、1ヶ月経った時少し楽しいと感じて、授業中も集中して取り組むようになりました。勉強だけではなく、日本とは違う文化や人々に触れることができました。

驚いたことは、釜山の人はとてもせっかちな性格なので、時間はきっちり守るということから、バスの運転手さんの運転がとても荒かったです。雨の日でも結構なスピードを出していて、手すりを力強く掴まないとバランスを保てませんでした。ですが、友達と買い物をした時は、私たちが日本人だと分かって日本語で話してくれたり、わかりやすい韓国語で話してくれたりと親切な人がたくさんいました。そういう優しさにも助けられ、留学生活を有意義に過ごせたのかもしれません。

4ヶ月という短い期間でしたが、人生でとても良い経験になりました。海外で生活したことで今まで見えなかった視点から物事を見て、考えて、感じることができました。留学で経験したことを将来役に立てたいと思います。

「第八回就活祭」報告

文学部・社会福祉学部四年生の就職内定者による就職活動報告会が、「第八回就活祭」として、令和二年一月三十日に実施された。就活際における四年生の報告は、一方的に就職内定に至る過程を話すのではなく、三年生や二年生の参加者達と互いにディスカッションをしながら就職内定への道を探る双方向的な報告会である。

今回、就職内定者の業種・職種は、小売・卸、不動産、情報通信、サービス、福祉、銀行、教員、公務員など多岐にわたり、英語・英米文学科三名、日本語・日本文学科十一名、社会福祉学科二名により、報告がなされた。参加者は、英語・英米文学科三年生四名、二年生一名、日本語・日本文学科三年生十一名、二年生三名、社会福祉学科三年生十六名の合計三十五名であった。

就活祭に対する四年生の意気込みは、目前に迫った三年生の就職活動に対する取り組み方や考え方などを伝授し、少しでも就職活動に対する不安解消につながりこれからの就職活動を無事乗り切ってほしいという思いが伝わって来た。また、二年生からの参加者もあり、就職活動に対する意気込みを感じた。

（就職課）

二〇一九年度　理事長賞授与者

文学部　英　語・英米文学科　間　山　希　美
日本語・日本文学科　木　村　優　子
社会福祉学部・社会福祉学科　安　保　佑　香
看護学部・看護学科　小　浜　海　都

大学生活を振り返って

文学部　英語・英米文学科卒　間山　希美

大学での四年間を振り返ると、楽しい思い出が思い浮かぶと同時に、辛かったこともたくさん思い浮かびます。そんな私の大学生活は、友人の支えによって成り立っていたと言っても過言ではありません。「英語が出来るようになったら今後の役に立つのではないか」といった軽い気持ちで大学に進学したものの、最初の数ヶ月は大学での日々に楽しさを見出せませんでした。そんな時に、悩みを相談でき、励まし合える友人との出会いがありました。辛いことを吐き出せる場ができたことに当時の私は救われたし、同じように悩みながらも努力する友人の姿は大きな励みになりました。その友人には今でも心から感謝しています。それからの大学生活は少しずつ楽しくなっていき、今では卒業後も仲良くしていたいと思える友人が複数います。そういった出会いは、私が大学に入って良かったと思える最大の理由です。

また、英語・英米文学科に入学したことで、高校までではなかった専門的な英語の勉強ができ、新しい経験がたくさんできました。海外の方々と直接関わり会話や文面でやりとりをしたことは、私にとって非常に良い経験でした。自分の決して流暢とは言えない英語でも会話ができることは大きな自信になりました。また、今まで吹替で観ていた映画を英語音声で観てみる、英語表記の説明書きを読んでみる、そういった日常の中に潜む小さなことが楽しく感じられるようになりました。外国語を学ぶ楽しさはこの学科に入ったからこそ知り得たものでした。英語は長い間触れずにいるとどんどん忘れてしまいます。四年かけて学んだことを無駄にはしないために、卒業後も英語の勉強は続けていきたいです。

四年間を通して関わったすべての方々には、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

卒業を迎えて

文学部　日本語・日本文学科卒　木村　優子

４年前、不甲斐ない自分に無力感を抱き、親にも自分にも甘えたまま大学に進学しました。入学当初は不安だらけでしたが、令和として最初の春、無事に卒業の日を迎えました。

４年間を振り返ると、長いようであっという間でした。講義が多く戸惑うまま受けた日、演習の発表や課題提出に追われた日、どれも鮮明に覚えています。特に４年次では、集大成とばかりに就職活動と卒業論文が待ち構えていて、１日１日を気合いでなんとか乗り切ったように感じます。思い返すと「大変だった」の一言ですが、そんな中で友人と悩みながらＥＳを書き上げたこと、卒業論文よりもくだらない話の方が何倍も楽しくて進んだこと、他にもサークルや実習など一つひとつが思い出です。

しかし時には、思うようにいかず苦しむこと、落ち込むことも多くありました。それでもこうして卒業できたのは家族や友人、先生方など周囲の人に支え、助けてもらったからこそだと感じています。

この多くの方々の支えと共に、私は『愚直』という言葉を心に留めて過ごしてきました。これは中学の恩師に言われた言葉で、文字通り「愚かなほど馬鹿正直に真剣に取り組むこと」を指します。これまで学業、部活動、趣味、どんなことでもこの姿勢を軸として行動することで、粘り強く最後までやり遂げる力が身についたと思います。

また、入学時に何気なく文学部を選びましたが、文学や言語、歴史、芸能など幅広い分野に触れられることは決して進路を狭めず、視野を広げて知識を吸収できる機会に恵まれたことで、物事に興味を持って学ぶことに貪欲になる姿勢も身につきました。このような学生生活で身についた力を、４月からは社会人として新たな環境でも活かせるように、努力を怠らず精進していきたいと思います。

最後に、４年間の学生生活で学んだことは無駄ではなかったと実感しています。春からの進路に緊張や期待、不安もありますが、これまでの経験がきっと役に立ち、私を支えてくれることと思います。

これまで支えてくれた家族や友人、先生方、関わってくれた皆様に心より感謝申し上げます。

祝卒業

卒業を迎えて

社会福祉学部　社会福祉学科卒　安保　佑香

今、卒業の時を迎えて、楽しかった学生生活が終わってしまうことの寂しさと、社会に出ることへの不安、そしてそれに勝るこれからの生活への期待を、ひとしおに感じています。

私はこの四年間の学生生活の中で、自分が変わっていくことを実感しました。社会福祉と言う、世の中に溢れてはいるけれど、これまではその外側しか見てこなかった領域を深く学べたことは、自分の持つ価値観を変える大きな要因となりました。

また、教職課程を履修し、教育現場を教師の立場で実際に体験出来たことも、更に異なる観点を獲得することに繋がりました。

変わったのは価値観だけではありません。私は学生生活の中で、何事にも積極的に挑戦することを意識してきました。高校までは未知の領域に踏み込むことが恐ろしく、自分が出来るものばかりを選択していましたが、大学に入ってからは、沢山の経験を積むことで自分の世界が広がると言うことに気付き、成功すると言う確信がないものであっても、その新しい機会に、自ら飛び込んで行くようになりました。ボランティアやイベント事など、様々なことに挑戦していった結果、自分の知識や能力が向上した他、学部を問わず、気軽に会話の出来る友人が増えました。更に、他者と沢山交流したことで、性格も明るく前向きになったように思います。

自分が動かなければ何も変わらない、自分が動けば周りの環境も世界の見え方も変わる、と言うことを、この四年の間に身を以て実感することが出来ました。

私が四年間でこのような良い変化を得ることが出来たのは、共に学び、喜びや辛さを分かち合ってきた友人や、迷った時、解決に繋がる道を示して下さった先生方、そして心身の両面を支えてくれた家族のお陰です。この四年間でお世話になった全ての方々に、感謝の気持ちでいっぱいです。

四年間の大学生活

看護学部　看護学科卒　小浜　海都

私の大学四年間は長いようで短かった。四年間の大学生活は苦しかったこと・楽しかったこと様々あった。入学時は見ず知らずの人々ばかりの中で、うまくやっていけるか不安でいっぱいだった。だがリトリートを通して、周囲の人たちや教員の温かさに囲まれ徐々に不安もなくなっていった。三年前期までは、講義とテストが中心であり、毎週講義の課題に追われ、始発の電車に乗り大学に通った日々もあり楽な大学生活ではなかった。

特に印象に残っているのは、三年後期から始まった領域別実習である。患者さんを受け持ちアセスメントから看護計画立案、実施・評価までを行った。これまでの講義や演習での知識を統合しながら実習を行うことが難しく、学んだことを実習先で生かすことができずつまずくこともあった。教員や実習先の看護師から指導・助言をいただきながら実習を行い、看護の難しさを感じた。大学の中だけでは学ぶことができなかったことが、実習を通して初めて理解することも多く実習の重要性に気づくことができた。実習中に患者さんからありがとうと声をかけていただいたことは心に残っている。その一言で、看護のやりがいを感じたことに加え、これまで学習してきたことが患者さんの力になったことが嬉しく感じた。ありがとうの一言で、頑張ろうと私の励みにも繋がり、これから看護師として臨床の場で活かせるようにしていきたい。

エアコンがなく、使用教室も限られ学習環境が充分であるといえない環境の中、友人や教員と過ごしと日々も今となってはいい思い出である。

四月からは新しい環境の中看護師として働くことになる。大学での講義や実習の学習面だけではなく、人として成長する貴重な時間を過ごすことができた四年間であった。私を支えてくれた家族や友人、教員すべての人に心より感謝申し上げます。

日本ソーシャルワーク教育学校連盟の成績優秀者表彰される

この度、二〇一九（令和元）年度の成績優秀者が決まり、三月十四日に表彰状の授与が学位記授与式後に行われた。

この賞は、社会福祉士・精神保健福祉士養成課程修了者で、学業成績・人物ともに優秀である学生に対し贈られるものです。

日本ソーシャルワーク教育学校連盟成績優秀表彰者は、外川いつきさん（社会福祉士養成課程）、工藤桜佳さん（精神保健福祉士養成課程）です。